

2010年5月15日 大阪大学歴史教育研究会

16世紀の日本と環シナ海域

～海禁と拡張のはざままで～

報告：伊川健二

0、本報告の試み

- 教科書から概説書、研究書へと至る、当該テーマにおける個々のトピックの断絶をつなぎあわせ、16世紀をひとつの継続した流れの中で捉える
- 海禁秩序の東アジアと、そのなかに入り込んだイベリア両国との葛藤を具体的に探る
→ネットワークの形成、求心力よりも阻害要因に目配りする方向性の提示

0-1、教科書の記載

- 大津透ほか『新日本史』(山川出版社、2008年)
 - 寧波の乱(p.139)、三浦の乱(p.141)、琉球(p.141)、鉄砲とキリスト教(p.159)、天正遣欧使節(p.159)、銀貿易(p.160)、南蛮貿易(p.160)、バテレン追放令(p.165)、サン・フェリペ号(p.165)、26聖人殉教(p.166)、朝鮮派兵(p.166)
- 16世紀前半のアジア関係と、後半のヨーロッパ関係が断絶

0-2、研究の現状・1（概説書）

- 勝俣鎮夫「15-16世紀の日本」（朝尾直弘ら編『岩波講座日本通史』10、岩波書店、1994）
銀産と唐船入港（pp.50-1, p.53）、遣明使節（p.51）、倭寇（p.53）、鉄砲とキリスト教（p.54）、南蛮船（p.54）
→それぞれが個別のトピックとして取り上げられているにすぎない。
- 朝尾直弘「16世紀後半の日本」（朝尾直弘ら編『岩波講座日本通史』11、岩波書店、1993）
ザビエル、鉄砲（p.5）、海禁、倭寇（p.5）、生糸、銀貿易（p.6）、琉球貿易（p.7-8）、倭寇と武器（p.11-3）、朱印船、キリシタン（p.55）
→倭寇と南蛮貿易はつなげるものの遣明使節とは断絶

0-3-1、研究の現状・2(専門書・日明関係史)

- 木宮泰彦『日支交通史』上下(金刺芳流堂、1926-7年)
- 小葉田淳『中世日支通交貿易史の研究』(刀江書院、1941年)
- 佐久間重男『日明関係史の研究』(吉川弘文館、1992年)

0-3-2、研究の現状・2(専門書・ 日朝関係史)

- 中村栄孝『日鮮関係史の研究』上中下(吉川弘文館、1965—9年)
- 北島万次『豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略』(校倉書房、1990年)
- 村井章介『中世倭人伝』(岩波書店、1993年)

0-3-3、研究の現状・2(専門書・琉球史)

- 東恩納寛惇『黎明期の海外交通史』(琉球新報社、1941年)
- 小葉田淳『中世南島通交貿易史の研究』(刀江書院、1968年)

0-3-4、研究の現状・2(専門書・日欧関係史)

- 岡本良知『16世紀日欧交通史の研究』(弘文荘、1936年)
- 岸野久『西欧人の日本発見』(吉川弘文館、1988年)
- 高瀬弘一郎『キリシタン時代の貿易と外交』(八木書店、2002年)
- 清水紘一『日欧交渉の起源』(岩田書院、2008年)

0-3-5、研究の現状・2(専門書・ キリスト教史)

- 五野井隆史『日本キリシタン史の研究』(吉川弘文館、2002年)
- ルイス・デ・メディナ『イエズス会士とキリシタン布教』(岩田書院、2003年)
- 浅見雅一『キリシタン時代の偶像崇拜』(東京大学出版会、2009年)

0-4、そこで

- このような現状から、1、2章で提示するキーワードを用いて新たなる16世紀像を構築し、
- とりわけ2章では、3章の前提となる、中国を中心とした環シナ海地域の事情を概観し、
- その上で、3章において明を軸とした海禁とヨーロッパの拡張との緊張関係のなかで、どのように日本航路が成立したかを探る

1、個別事象をつなぐキーワード

- 三浦の乱と寧波の乱
→上松浦太守源勝書簡
- 遣明使節と倭寇
→種子島渡唐船
- 倭寇と南蛮貿易
→リマホン
- 倭寇と朱印船、日本町
→平和に渡航した最初の日本人等

1-1、三浦の乱と寧波の乱

- 1555年朝鮮礼曹宛、上松浦太守源勝書簡
策彦周良ら遣明使節が、1547～8年に奥山滞在を余儀なくされた経緯について「ただ紹命を軽んじ使節を蔑む」と報告
→遣明使節と韓半島へ出入りする倭人との人的結合を示唆

1-2、遣明使節と倭寇

- 種子島渡唐船

「鉄砲記」:「天文壬寅癸卯(1542-3)」に3艘の朝貢船が明へ渡航

- このうち1艘は45年4月までは明国内で交易をし、倭寇の頭目王直を同行して帰国

→正規のルート使節、非正規の倭寇という図式では必ずしもなく、両者が入り乱れた実態

1-3、倭寇と南蛮貿易

- リマホン(林鳳)

1571年10月、神泉、海澄を攻めて敗退

劉堯誨が派遣した軍により淡水へ追われる

1574年11月29日マニラへ襲撃を開始(一団にはシオコを称する日本人)

1589年、広東を襲撃

1-4、倭寇と朱印船、日本町

日比関係の成立過程

- 1586年日本人(海賊)のフィリピンからの撤退の意図が報じられる(他方で襲撃を植民を意図しているともされる)
- 1587年松浦鎮信、大村純忠の遣使(後者は「平和に渡航した最初の日本人等」)
- ルソン壺交易
- 1593年のマニラには400人の日本人

1-5、まとめ

- 16世紀に生じた諸事件を別個の事件として捉えるのではなく、共通する人間集団による継続性のなかで理解しうる可能性
- その「人間集団」としては倭寇が想定でき、漢文、欧文史料の両側面からの研究の深化が必要

2、全体を包括するキーワード

- 銀
- 商業と暴力
- 島

2-1、銀

- 石見銀山の生産量が最盛期(17c初)で約1万貫(4万kg) = 世界の銀産量の15分の1
- 1560年バルトロメウ・ヴェーリヨの地図に「as minas da prata(銀の鉱山)」
- ザビエルも堺へ集まる日本銀に着目
- しかし、銀を産すればどこでも商人を吸収するののか？

2-1-1、バルトロメウ・ヴェーリオ

(カリフォルニア、ハンチントン図書館蔵)



2-1-2、銀？

- 大西信行「16世紀朝鮮半島における倭銀の流通とその条件」(石見銀山歴史文献調査団編『石見銀山 研究論文篇』思文閣出版、2002年)のインパクト
- 軍資と奢侈の費用捻出のため、咸鏡道端川の銀山開発が一時されるが、1533年中宗の意向により採掘停止
 - 「銀産＝交易の契機」ではなく、制度が交易を阻害しない点を考慮する必要がある

2-2、商業と暴力

- 遣明使節

1453年以降、毎回傷害事件の記録

- スペイン艦隊

マゼラン、ビーリャロボス艦隊と先住民の葛藤

- 海禁

「外国人が立ち入ることがないよう、用心(1546年)」

「ポルトガル人に反対して決起(1549年)」

- 荒唐船

「その殺さる者はすなはち、作賊の徒のみ(年次未詳、賊倭)」

- 倭寇

パッタニーで倭寇の襲撃にあった宣教師(1555年)

2-3、島

- 双嶼

1526年以來、密貿易の拠点となる

- 奥山

1547年6月～48年3月まで策彦周良らが滞在

- 上川

1552年8月～12月までザビエルらが滞在

- マカオ

1555年からポルトガルの拠点として機能

- フィリピン

「この島に居れば、自分を追跡している国王の軍隊から安全に逃れることができる」(リマホン)

2-4、まとめ

- 銀が東南アジアから日本の航路成立の一要因であったことは否定できないものの、すべてを銀産のみで説明しきれぬかは疑問
- 密貿易は安全な往来が保証されないため、暴力が必要とされる→朝貢貿易からのネットワーク再編
- 1540～50年代に中国島嶼部に密貿易拠点が萌芽→日本航路確立の前提

3、ふたつの世界が出会う場所 ～海禁と拡張のはざままで～

- **海禁**

すべての中国沿海民の出海を禁止

→海防、貿易、朝貢が一体化

1509年、広州での外国商船の入港を許可

1567年、月港開港

- **拡張**

1415年、セウタ攻略

1494年、トルデシーリャス条約

1511年、マラッカ攻略

1565年、フィリピン征服開始

3-1、朝鮮、琉球

- 【朝】荒唐船(1540~50年代)
→明へ送還
- 【朝】ポルトガル人漂着(1578年以前)
→殺害(=ポルトガル人との通商を望まない)
- 【琉】エスカランテ記録(1543年)
→2度目に渡航したポルトガル人の上陸拒否
- 【琉】1557年以前に浙江で敗退した倭寇を撃退
- 琉球の東南アジア派船は著名でありながら、来航船は認めない姿勢がある

3-2、日本へ来航した異国船

- 1534年1月15日、異国船16艘、種子島西之表へ大砲を打ち込む
- 1539年11月、唐船、国上村湊へ漂着
- 1540年6月26日、唐船、種子島竹崎浦へ入港
- 1541年7月27日、豊後神宮寺へ入港
- 1542年頃、豊後へ華人80余人が漂着
- 1543年8月25日、種子島西村へ到着
- 1544年7月27日、29日、阿久根へ入港
- 1544年7月頃、小瀬寝へ入港
- 1544年、種子島熊野浦へ入港
- 1546年、ジョルジェ・アルヴァレスの船、山川へ入港
- 1548年、ポルトガル船来日と推定される
- 1549年7月26日以前、江ノ島へ入港
- 1549年7月27日、伊勢へ入港
- 1549年8月15日、唐船、鹿児島へ入港
- 1549年、ポルトガル船来日
- 1550年7月、ポルトガル船、平戸へ入港
- 1551年7月21日、越前三国へ入港

3-3、鉄砲伝来の意義

- 日欧交渉の起源

マカオに先立ち、東アジアにおける交易拠点
確立過程の端緒

- 技術移転の一例

鉄砲という道具の伝来にとどまらず、生産技
術が整ったことの意義

3-4、なぜ種子島か

- 奄美大島までは琉球の版図
- トカラ列島は寄港地たりえない
- ∴ 種子島は事実上、日本の最南端
→ 日本の最前線で新たな交流が萌芽



3-4-1、1541年着?

...desse vno se foy de athena foyrta...
...entre Portuguezes em sua...
...recebido...
...estada em...
...tanto que...
...tantas...
...mais e acerca de duas...
...beber em...
...dava...
...outro bebia de...
...mais respeito...
...com...
...nome...
...que hum...
...seu...
...de...
...de...

Jose Manuel Garcia, *Cartas que os padres e irmaos da Companhia de Iesus escreverao dos Reynos de Iapao & China aos da mesma Companhia da India, & Europa, des do anno de 1549 ate o de 1580* (Maia: Castoliva Editora, 1997) p.13

3-4-2、1541年着？

- 日本発見に際して、フェルナン・メンデス(・ピント)は他の2~3人のポルトガル人とともに中国のジャンクのなかにいたと述べた。(中略)彼ら(ポルトガル人たち)は海を渡るために、そしてとりわけ水の著しい欠如のために多大な困難を克服した。(中略)なぜならもっとも敬意を払われているポルトガル人たちには、これらの辛苦の果てに(15)41年のサン・ジョアンの日(6月24日)に日本の地を確認したことを聞き、タノシマという名の港に到着した日まで、日に半クアルティーニョ(約250cc)の水が提供されたからである。ここでフェルナン・メンデスは死の危機に直面した。それは彼の責任ではなく発生した災難のためであった。彼が眠っていた時、その地の王またはトノの息子が来て、すでに発砲したのを見ていたため、フェルナン・メンデスの銃(アルカブス)を発砲した。
- No primeiro descobrimento do Japao se achou Fernao Mendez com alguns dous ou tres Portuguezes em hum junco dos Chins [...] fugindo pasasarao grandes trabalhos pelo mar e grande falta especialmente dagoa, [...] posto que com os portuguezes usando de msis respeito, dauao lhe algum meio quartilho dagoa cada dia, ate que com estes trabalhos ouueram uista da terra de Japao e chegarao a hum porto por nome Tanoxima em dia de S. Joao no anno de **quarenta e hum**. Aqui correo Fernao Mendez risco de ser morto por hum desastre, que lhe aconteceo sem ter culpa. Porque estando dormindo ueio hum filho do rey ou tono da terra e ceuou hum arcabuz de Fernao Mendez por lho ter ja visto ceuar,

ジョバンニ・ピエトロ・マッフェイ筆「フェルナン・メンデス・ピントの証言」

伊川健二「鉄砲伝来の史料と論点(上)」(『銃砲史研究』361、2008年)pp.39-40より

3-5、まとめ

- 明、朝鮮における懐柔システムの限界
 - 恒常的密貿易ネットワーク(夷船通交)の希求
- 中国島嶼部の特殊性(2-2)
- 種子島、九州への上陸
 - マラッカ-リャンポ-日本航路の成立
- 中国島嶼部への倭寇掃討作戦
- 別ルートの模索(モルッカ、フィリピン経由)
 - 航路開拓に伴う暴力
- マニラ日本人町の成立
 - ヨーロッパ人入植地が中継地として存続

ふたたび日本航路の意義 ～まとめに代えて～

- 海禁秩序の間隙に成立したルート
＝マラッカ－リャンポー－日本ルートは、ネットワークの形成、求心力よりも、むしろ阻害要因が国際交易ルートの形成に大きく影響していることを示す事例
- マニラ日本人町の成立
＝スペインの入植に加え、倭寇掃討作戦の影響の少ない中継地の必要性
→東南アジア－日本間航路の中継地が、中国島嶼部からマニラへ拡大したことは、国家、非国家による阻害要因(制度、暴力)が、ネットワーク形成を規定していたことを示す象徴的変化と考える。